

第4表 1963年播収量調査 (a 当り kg)

区名	全収			上物					中物					下物				
	個数	重量	1球平均重g	個数	同%	重量	同%	1球平均重g	個数	同%	重量	同%	1球平均重g	個数	同%	重量	同%	1球平均重g
1 9月10日	2065	328	159	390	15.8	94	26.8	241	970	48.1	156	49.1	160	705	34.2	78	24.1	111
2 " 15	2320	369	159	370	15.8	89	23.8	240	1,435	61.1	221	59.3	154	515	23.1	59	16.9	114
3 9月17日	1,660	241	145	300	18.1	68	28.6	228	895	53.5	123	50.4	137	465	28.5	49	21.1	106
4 " 15	1,955	251	128	155	6.9	35	12.6	229	1,080	53.4	162	63.5	150	720	39.8	54	23.9	75
5 9月24日	825	109	132	45	5.2	10	9.0	231	400	47.1	61	55.7	153	380	47.8	37	35.4	98
6 " 15	715	113	158	100	13.9	24	21.3	240	325	45.9	56	50.3	173	290	40.3	33	28.4	113
7 10月30日定植	1,685	349	207	665	38.5	175	49.2	263	810	48.8	153	44.3	188	210	12.8	21	65.7	102

収穫重：収量において晩播の9月24日播種区は9月10日播種区に比し32%とかなり低くなつてその減収が甚だしい。

播種期：1962年の如く播種期の気象に恵まれた年は9月15日直播で良結果が得られ、1963年の如く気象条件が悪い年次にあつては9月10日播種でも良結果とは云いがたいこともある。以上からして直播の播種期は9月10日～9月15日とその幅はせまい日数である。

4 む す び

東北地方における玉葱の秋季直播の時期は9月10日～9月15日とその播種期間は幅のせまい日数である。このことは9月最低気温において、第2・第3半旬とも

に17.4℃前後の気温が、第4半旬になれば15.5℃と急に低温となる。地下5cmの地温においても9月第2半旬で1.9℃第3半旬21.5℃の地温が第4半旬になれば20.2℃と低温のあらわれが判然とする。したがつて冷害のおそれのある年次においては早目に播種することが肝要である。次に9月第2、第3半旬の頃は台風季節でもあるが、一般に乾燥期であるため、ほ場条件に特に注意しなければならない。播種当時の乾燥は幼苗の生育にかなりの影響をあたえ、直播玉葱の多収、少収の決定的要因となるので、ほ場条件は有機質の豊富な肥沃ほ場でなければならない。この条件のよいほ場にあつては10a当りの播種量は1～1.2ℓで移植栽培と同様な結果が得られる。

寒地におけるねぎの品種と生態について

第2報 越冬栽培の品種について

平尾陸郎・酒井雄行

(青森県農試)

1 ま え が き

寒地育成の品種について、越冬性のほか、栽培期間中の耐暑性あるいは生育状況など生態的に差があるのではないかと考えられるので、暖地の品種も併用し、1962年、1963年の2ヶ年栽培試験を行なつたので、その結果について報告する。

2 試 験 方 法

1 供試品種

(1962年)千住・伯州・砂村赤柄・会津・砂村合柄・

飽海・石沢・石倉・長谷・札幌・源吾・飛禪・高畑・南部(A)・南部(B)・南部(南)

(1963年)札幌・石沢・石倉・長谷・南部(A)・南部(B)

(註)南部(A),(B)は當場において南部太の中から昇りがよく分けつの少ない系統を選抜し育成中のもの。南部(南)は南部町産のもの。

2 耕種法

項目 試験年度	播種期	定植期	育苗 日数	栽植 距離	収穫期
	月日	月日	日	cm	月日
1962年	4.25	7.27	94	90×7.5	4.5
1963年	5.10	8.2	95	90×8.0	4.14

供試面積

1962年 1品種0.25a 2区制
1963年 1品種0.15a 4区制

3 試験結果

1. 越冬中の生育状況

(1962年)

越冬中の生育を葉数(展開葉)と1株重についてみると第1図のとおりで、1月の調査では凍雪害によつて枯損した葉が多く、葉数は12月より減少していた。2月に入つてからは深い積雪に保護されたためか、1月に比較して葉数の増加した品種が多かつた。3月の調査では再び葉数の減少がみられるが、越冬前に葉数の少なかつた。札幌・会津・飛禪・源吾の各品種は越冬中及び越冬後の葉数は比較的減少が少なく、また砂村・高畑等も分けつのためか減葉は少なくなつてゐる。

1株重においては、札幌・会津・飛禪及び源吾の減少

曲線がゆるやかで、その他の品種では高畑をのぞいて2月から3月にかけて、急速に1株重の減少しているのが目立つた。

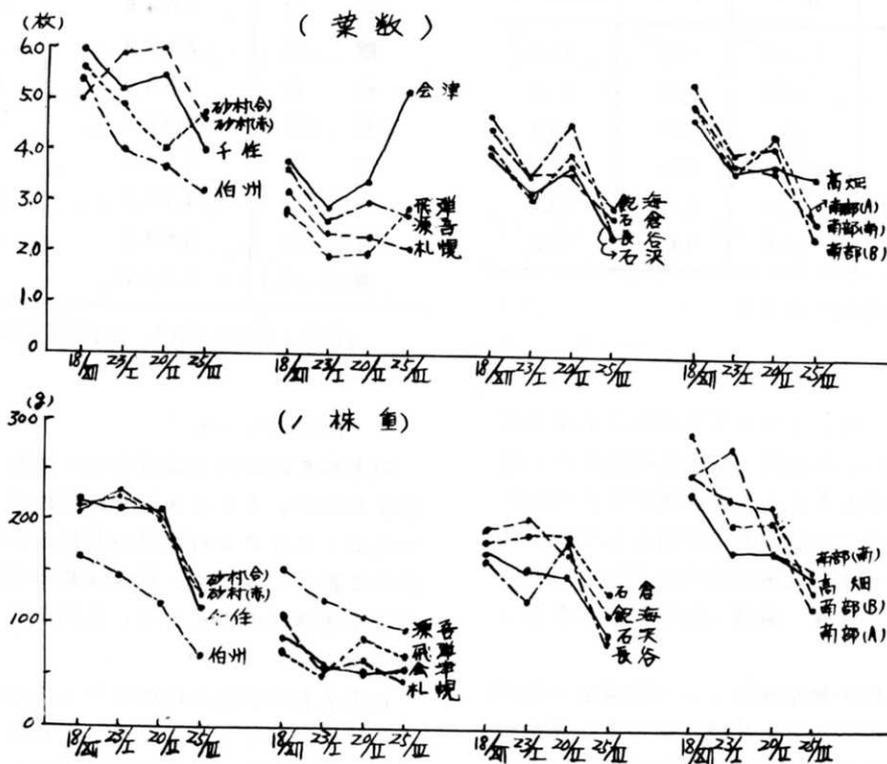
また4月上旬、各品種の越冬状況を調査したが、各品種とも殆んど全株が越冬して、品種による越冬性の差はみとめられなかつた。

この越冬率が高かつたのは1962年度の積雪が多く、しかもその消雪が3月下旬に急速に行なわれ、消雪期及びその後の気温が高く、積雪量の割に融消雪期間が短く融雪水による根の生育抑制が少なかつたことなどが原因しているものと思われる。

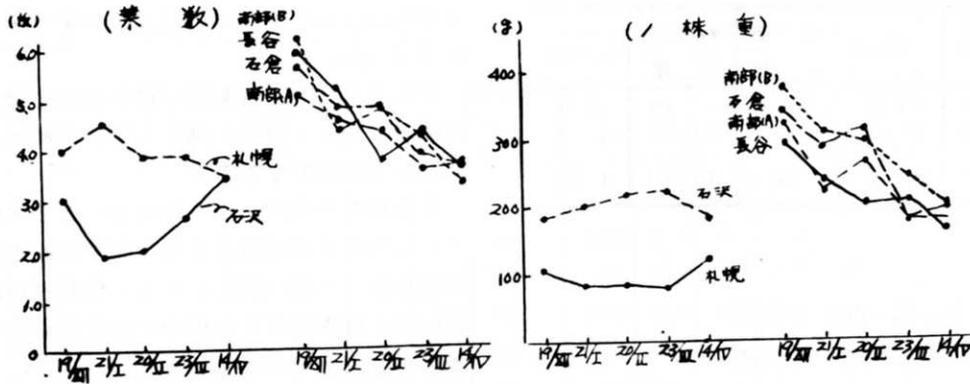
(1963年)

1962年同様、各品種の葉数と1株重について越冬中の推移をみると、第2図のように、葉数(展開葉数)では石倉・長谷及び南部2系統とも越冬前12月に比べて越冬中は凍雪害により枯損し、4月までに30%内外の減少を示しているのに対して、石沢の減少は少なく、札幌も1月、2月は減少がみられたがその後葉数が増加し、越冬後には12月の葉数と差がないまでに回復していた。

1株重も葉数と類似の傾向を示し、札幌は1月及び2月には越冬前に比べて減少しているが、3月下旬から4月中旬にかけて増加しており越冬前よりもやや重くなつてゐた。石沢では越冬中の1株重に減少がみられず、3月下旬から4月上旬にやや減少しているが、



第1図 越冬中の各品種の葉数と1株重の推移(1962)



第2図 越冬中の各品種の生葉数と1株重の推移(1963)

越冬前との差はみとめられなかつた。しかし長谷・石倉・南部2系統は越冬前の重量に対して、40~50%の減少率を示している。

越冬の状況を見ると第1表のように品種間に差がみとめられ、札幌・石沢・南部2系統はそれぞれ90%以上、石倉は84%、長谷では58%の越冬率を示し、従来越冬率の低いとされていた石倉が意外によく越冬した。

第1表 各品種の越冬率 (1963)

品種	区別			3区平均
	I	II	III	
札幌	920%	1000%	940%	953%
石沢	900	980	940	940
石倉	860	800	880	846
長谷	400	700	640	580
南部(A)	900	920	920	913
南部(B)	1000	980	940	973

(註) 1区当り株数~50株

2 収量について

1962年は4月5日、1963年は4月14日にそれぞれ収穫を行ない、各品種の収量を調査した、兩年とも圃場の都合で春ねぎとしては収穫が早かつたため、葉の生育が不十分で越冬ねぎの収量としては少目であるが、1962年度では南部各系統及び砂村合柄が多く、札幌・会津・飛禪・源吾・長谷等が少なかつた。

1963年度には越冬健全株について収量をみたが、南部各系統及び石沢が多収で、札幌は越冬率は高かつたが株が小さく、4月中旬の収穫では収量があがらなかつた。

第2表 越冬後の各品種収量(a当り換算)

品種	年次別	
	1962年	1963年
千住	2383 Kg	Kg
砂村合柄	2479	
砂村赤柄	2935	
伯州	2525	
会津	1608	
札幌	1149	1575
飛禪	1201	
源吾	1616	
石沢	2045	2378
飽海	2154	
石倉	2348	1999
長谷	1638	1256
高畑	2113	
南部(A)	4750	2381
南部(B)	2817	2563
南部(南)	3352	

(註) 1962年2区, 63年3区平均(1区3.3m²)

3 抽苔について

越冬ねぎにおいては越冬後の抽苔が、品質に大きく関係するので、1963年度にこれについての調査を行なったが、2月20日以降の苔長と収穫時における抽苔状況は3表のとおりで、札幌は苔の発育がおそく、長谷と南部2系統はやや早目で、石沢及び石倉の苔の伸長は早かつた。

抽苔も苔の伸長とほぼ平行して行われ、石沢及び石倉の抽苔株は多く、南部2系統と長谷がこれについて多く、札幌では収穫時の抽苔株が全然みられなかつた。ただ石沢の中には寒地夏ねぎに似て、葉色が濃く葉鞘の短い苔だちのおそいものと、暖地冬ねぎ型の葉色が淡く、葉鞘の伸びがよい抽苔の早いものと、抽苔性の異つた二つの型がみうけられた。

第3表 苔の発育状況と抽苔率(1963)

項目 品種	苔の長さ(5株平均)(cm)			抽苔率(%) (150株当り)
	月 日 2 20	月 日 3 23	月 日 4 14	
札幌	1.8	2.9	7.7	0
石沢	11.4	17.8	28.3	13.0
石倉	10.7	12.3	26.6	11.0
長谷	3.2	8.4	13.8	2.0
南部(A)	11.7	9.3	15.5	4.6
南部(B)	7.7	7.0	10.6	6.0

4 越冬中の全葉数について

12日以降、各品種について、葉鞘内の未展開葉を含む全葉数の推移をみると4表のように、札幌では3月下旬まで殆んど葉数に変化がなく、生育が停止しており、他の品種では12月以降3月下旬までに、石沢は16.5%、石倉・長谷・南部2系統は30%内外の葉数減がみられ、これらの品種は順次外葉が凍

第4表 越冬中における全葉数の推移

項目 品種	調査月日					減少率		4月14日の 展開生葉数
	月日 12 19 (A)	月日 1 21	月日 2 30	月日 3 23 (B)	月日 4 14 (C)	(A)-(B) / (A)	(A)-(C) / (A)	
札幌	9.0 (枚)	8.2	8.6	8.4	5.3	6.6 (%)	41.1 (%)	3.5 (枚)
石沢	8.6	9.0	7.8	7.2	3.5	16.5	59.3	3.5
石倉	10.6	9.8	9.4	7.8	3.8	26.2	64.2	3.5
長谷	10.6	10.2	10.0	7.4	5.3	31.5	50.0	3.7
南部(A)	10.2	10.0	8.6	6.6	4.7	35.2	53.8	3.6
南部(B)	11.8	9.4	8.8	8.4	4.6	28.8	61.0	3.3

雪害をうけ損耗していると同時に、越冬中も新葉を出しながら生育を続けていることがみとめられ、石沢は生育量や損耗の割合が少なく、石倉・長谷・南部2系統は大きいようにみうけられた。

3月下旬以降4月中旬までの減葉は各品種とも多くなっているが、これは消雪春暖によつて生育が盛んになつたが、1963年度は前年に比べて積雪量が異なり、3月中旬以降の積雪量が30cm前後で、しかも融雪期間が長く、消雪期前後の気温が低いなど、生理的障害によつて葉の損

耗が多くなつたのではないと思われる。

4 む す び

以上の結果から、春ねぎとして栽培されている札幌を除いて、越冬栽培用品種としては、越冬性もあり抽苔も比較的小さい。南部一本太が一応春ねぎとして利用できるように思われる。